

# 露出ファッションのジレンマ 見せる技術と見られる身体をめぐる

国際ファッション専門職大学 田中雅一  
オレゴン州立大学 Graduate Pathway for MBA 蔡 天虹

## 要旨

本論文の目的は、肌を過剰に見せたり、ボディラインを強調したりする「露出ファッション」を取り上げ、ファッションをめぐる女性のエイジェンシーについて考察することである。過剰な身体露出を演出するには、隠れた形で身体への配慮がより一層必要である。この結果、露出ファッションがあらわにする身体は、「生身の身体」からはほど遠い。露出された身体で女性はず、「ふしだらな女性」という誤った印象を他者に与えることになる。さらに身体に他人の視線が集まり、衣服が相対的に軽視されるという事態が生じる。本論文では、これを「露出ファッションのジレンマ」と名付ける。自分の評判を気にする女性は露出ファッションを避ける。同じく身につけている衣服を評価して欲しい女性も露出ファッションを避けるはずである。この意味で露出ファッションは、自己否定の要素を含むファッションなのである。

本論文では露出ファッションの大きな流れを辿り、欧米における露出ファッションの興隆と普及は下着の変化と密接に関係していることを明らかにした後、露出ファッションを可能にする下着やそれ以外の小道具を紹介し、インタビュー・データをもとに女性たちの配慮を考察する。つぎに男女のインタビュー・データをもとに露出ファッションを好む女性たちのジレンマに迫る。最後に露出ファッションを身につけた女性たちのエイジェンシーを考察する。

## キーワード

ジェンダー、エイジェンシー、視線、肌見せ、ボディライン

## 1 序章

「私は、肌やボディラインを露出するファッションを好み、頻繁に着用している。幼い頃から、下半身に感じる布の肌触りが嫌で、ロング丈のボトムスを着るのを避けていた。高校に入学すると、友人たちから脚の形を褒められることが多くなり、嬉しさからいっそ丈の短いショートパンツやミニスカートを履くようになった。同じ頃バンド活動を始めたこともあって、パンクファッションが好きになった。パンクファッションは、露出度が高くサイズ感が小さい衣服が主流であるため、今度は体型管理にも気を使うようになった。太っていたり胸が大きかったりする女性にパンクファッションは似合わないからである。

当時の私はまた、頻繁に下着ショップに立ち寄っていた。自分のバストを理想的な形に整えてくれるフィッターに憧れを抱き、大学に入ってから下着ショップでのアルバイトを始めた。そこで下着に関する知識をたくさん学ぶことができた。私は、大学入学後も露出度の高いファッションを着用し、同時に下着ショップで仕事をするなかで、下着の選択によってスタイルの見え方が大きく異なることに気づいた。着るトップスによってブラジャーを変えたり、コルセットやガードルで体型を整えたりすることで、私は露出ファッションがさらに楽しいと思うようになった。

しかし、露出ファッションを身につけると、私は自分の服装に対する周囲の反応に違和感を感じることがあり、もやもやすることが多かった。私は、本論文を通して、この違和感の正体について深く掘り下げていきたいと思った。」  
(共著者、蔡の言葉より)

## 1.1 問題の背景と目的

何も身につけていないのではないかと思わせるモデルたちがランウエイを闊歩する風景に衝撃を受けたのはいつの頃だったのか。今ではそんなファッションを身につけた女性に街中で出会うことも珍しくなくなった。セクシーな格好の女性は、それだけで人目を引く。それは異性に限らず同性をも引きつける。その理由は、性的魅力であったり、プロポーションの良さであったり、はたまた思わず顔をしかめたくくなるような下品さのためだったり、見る者によってさまざまである。肌を過剰に見せたり、ボディラインを強調したりする「露出ファッション」には、下着を含むさまざまな技術によって「みっともない身体」の露出を避けようとする努力が認められる。

このような配慮にもかかわらず、露出は「はしたない」と十把一絡げに非難され、男性の性的好奇心に刺激を与える愚かな行為ともみなされてきた。服装のせいで性暴力の被害にあっても自業自得だというのである。このような批判的言説に女性のエイジェンシー（agency）すなわち能動性は認められない<sup>1)</sup>。はたして露出ファッションを選ぶ女性たちは、この世を今も支配する男性中心のまなざしに従属する本当に愚かな存在なのだろうか。このような問題意識を念頭に、本論文では、現代日本の女性を対象に、露出ファッションに見られる「見せる技術」や女性自身の身体への配慮に注目する。なお、タイトルの「露出ファッションのジレンマ」とは、自慢のファッションではなく肌やボディラインにしか視線が集まらないことを意味する。

ここでは露出ファッションをアウターに限定しているが、これは、肌の露出を目的とする「肌見せファッション」とボディラインの露出を目的とする「ボディラインの出るファッション」の二つに大きくわかれる。前者はさらに、以下の三種類にわけられる。

1) 肌見せ：ミニスカート、ショートパンツ、ノースリーブ、ヘソ出しルックなど、肌の面

積が多く露出している衣服。

2) プチ肌見せ：デコルテ（首から胸元）、うなじ、五分以上の袖や裾丈から見える腕や脚など、肌の面積が「肌見せ」に比べて少なく露出している衣服。

3) 透け見せ：シースルー素材やレース素材など透ける素材、またはメッシュ素材が使用されているもの、ショルダーカットのように一部がカットされ肌が露出している衣服。

## 1.2 露出ファッションに認められる自己否定

露出ファッションを好む女性たちは、一見華やかに見えるが、その内側にまとう下着はセクシーとはほど遠い。彼女たちは己の身体的魅力をファッションに活かすため、その身にさまざまなものを工夫して装着する。本論文では、この工夫を「見せる技術」と名付ける。しかし、そのような技術は、表面には出てこない。体を頭からつま先まですっぽり覆うような衣服なら、こうした技術は不要である。もちろん一般的な衣服においてもムダ毛処理や補正機能を有する下着が必要な場合もある。しかし、露出ファッションの場合、過剰な身体の露出が、より一層隠れた形での身体への配慮を必要とするのである。露出ファッションといっても、なんでも見せようとするのではなく、見せたいところをより効果的に、かつ下品な印象を与えないように見せようとする女性の配慮が際立っているからである。

つまり、あらわになる身体は、「生身の身体」とは異なる。露出ファッションによって露出するのは、肌であれボディラインであれ、身体其自然な表出ではない。むしろさまざまな技術を使って身体を拘束・矯正し他者の期待に応えるために生まれた「加工された身体」あるいは「文化が刻印された身体」なのである。

世間では、露出ファッションに身を包んだ女性は「ふしだら」「はしたない」というレッテルを貼られ、低く見られることになる。そ

れが根拠のない判断であっても、服装で女性を貞淑かふしだらかに分類する思考は今なお支配的である〔田中 2019〕。露出ファッションを選択する場合、女性たちはそれ相応のリスクを冒しているということになる。

露出が増えれば増えるほど、人々の視線は露出した肌やボディラインに集まり、衣服自体から遠ざかるという事態が生じる。ファッションに凝ったからといって、そこに人々の視線、とくに男性の視線が向かうわけではない。そもそも、女性たちがファッションブルな衣服に身を包むのは、それを自ら楽しんだり、着衣の姿を他者に見て欲しいという理由からだ。しかし、露出ファッションは、自分では楽しんでいても、他者の視線は衣服というより肌やボディラインに否応なく集まる。ここに、「私は他人に身体を見せたいのか、衣服を見せたいのか」という露出ファッションを好む女性の逡巡——「露出ファッションのジレンマ」が認められる。

見せる技術に注目すると、露出ファッションは、露出されていない場所が重要である。とくにボディラインを強調する露出ファッションは、このような傾向が強い。しかし、露出ファッションがアピールするのは、衣服やコーデ、すなわちファッションではなく露出された場所、すなわち肌やボディラインである。見せる技術が露出ファッションを演出するのに似て、露出ファッションは露出した身体を演出する。こうして、露出ファッションは表舞台から消えて裏方へと引き下がる。かわって表舞台に登場するのはあらわになった身体——肌やボディラインである。ここで女性たちは自らの身体に圧倒（疎外）されるという状況が生じる。

つまり、自分の評判を気にする女性が露出ファッションを避けるだけでなく、身につけている衣服を評価して欲しい女性も露出ファッションを避けることになる。この意味で露出ファッションは、自己否定の要素を含むファッションなのである。ファッションを

通じて自己を見せたい、他者を魅せたいという女性の思いは阻まれてしまうのである。それはまた、彼女たちのエイジェンシーを否定することになる。

### 1.3 先行研究のレビュー

はたして女性は、美容やファッションによる美化を通じてエンパワーするのか、つまり自信を得てエイジェントとして社会変革を目指すことが可能になるのか、それとも美しさの獲得は男性の期待に応えるものでしかなく、結局のところ男性中心の社会規範に従属するだけなのか。こうした問いについては、すでに美容や整形の性格をめぐる論じられてきた<sup>2)</sup>。この論争で無視できないのが英国在住の社会学者キャサリン・ハキム (Catherine Hakim) の『エロティック・キャピタル (原題: *Honey Money: The Power of Erotic Capital*)』(原著は 2011 年出版) である。

ハキムは、経済資本、人的資本を含む文化資本や社会関係資本にならぶ第 4 の資本として「エロティック・キャピタル」の存在を指摘する。それは、「美しさ、セックスアピール、快活さ、着こなしのセンス、人を引きつける魅力、社交スキル、性的能力などが組み合わせた外見の魅力と対人的な魅力を総合した」個人資産を意味する〔ハキム 2012: 17〕。彼女はまた、「世間一般に向けての美的・視覚的・身体的・社交的・性的な魅力が結びついたもので、どの場合もとくに異性に対してのアピールが中心となる」〔ハキム 2012: 24〕と述べる。そして、美しさ、セックスアピール、社交スキル、生き生きと輝いていること、自己演出力、セクシュアリティ、ときに多産であることの 7 項目について詳しく論じている。

欧米に限って言えば、経口避妊薬が欧米で普及する 1960 年代になると、人々のセックスの回数も性的パートナーの数も増え始める。女性だけでなく、男性たちも生涯にわ

たってエロティック・キャピタルに磨きをかける必要が出てきた。エロティック・キャピタルの蓄積を可能にする技術も開発されている。美容やアンチ・エイジングは女性だけのものではなくなった。とはいえ、性的欲求不満に慢性的に陥っているのは男性のため、エロティック・キャピタルに基づく魅力はつねに女性に有利であると述べる。

にもかかわらず、エロティック・キャピタルの価値は公に認められてきたとは言えない。家父長制に支配された社会では、女性を聖母マリアと売春婦、良い女性（グッド・ガール）と悪い女性（バッド・ガール）に二分する考え方が支配的で、露出の多い女性に「ふしだらな女」というレッテルを貼ることで、セクシュアリティと外見をコントロールし、エロティック・キャピタルを抑圧してきた。[ハキム 2012: 93-94]<sup>3)</sup>。

「立派な」(respectable) 女性と「そうでない」(not respectable)<sup>4)</sup> 女性の差は、服装や外見によることが多い。従順でなかったり男性の権力に従わなかったりする女性に汚名を着せ、ふしだらな (wanton) 女という刻印を押して評判を傷つけることは、とくに誰もが顔見知りの小さなコミュニティでは効果的だ。しかし、服装による表現は、評判などより万人にわかりやすいものだ。(中略) 現在は、何人も恋人がいる娘や、超ミニをはいたり胸の谷間を見せすぎる女性を「ふしだらな女 (tarts)」と決めつけてレッテルを貼ることで、女性のセクシュアリティ (ママ) と外見をコントロールしている。家父長制に基づく男性優位社会は、3500 年前から女性の性生活 (promiscuity) を支配し、女性が公の場でエロティック・キャピタルを露出するのを抑えつこうと手段を講じてきた。[ハキム 2012: 94]

加えて、「女性の武器」を使うことに禁欲的なフェミニズムが、エロティック・キャピタルの有効性を無視してきた。

このように論じるハキムは当然、女性のエロティック・キャピタルを強調する露出ファッションにも肯定的と思いたいが、「デートのときと職場での服装、魅力的な装いと人の気を散らせる服装には天と地ほどの開きがある。エロティック・キャピタルには自己演出や着こなしのうまさも含まれるが、それは会議室であろうと寝室であろうと、ときと場所に合った服装をすること」[ハキム 2012: 243] と述べるにとどまっている。

露出ファッションが、女性の性的魅力を際立たせることに貢献しているのはたしかだが、露出がつねに他者をいい意味で引きつけるわけではないことは、上記のハキムの文章からも明らかである。露出ファッションではなく、TPO をわきまえたファッションがエロティック・キャピタルの効果的な使用法だと言いたいようだ。

ここで留意したいのは、エロティック・キャピタルはあくまで個人の所有する資質(資本)として位置付けられていることである。個人はこれらを蓄積したり、使用したりしながら、より良い人生を歩もうとする。そこには手段と目的が密接に結びついた個人的な戦略が想定されている。露出ファッションもまた、TPO に応じて効果的な手段となる。この意味で、キャピタル (資本) という観点から露出ファッションを考察する可能性を否定できない。たとえば最初のデートに露出ファッションは適切かどうかと自問する女性は、どうすればうまくエロティック・キャピタルを使用できるかどうかを悩んでいると理解できる。

しかしながら、ハキムの議論から抜け落ちるのは、たとえ露出ファッションが TPO に相応しいスタイルであったとしても、露出ファッションのジレンマのせいでエロティック・キャピタルを行使するはずの女性のエイ



ジェンシー自体が否定されるという問題である。すなわち、肌やボディラインを見せることで、女性たちは男性を引きつけるかもしれないが、男性の視点は衣服ではなく、露出されている身体に向かう。それはまた、衣服を選び身につけている当の女性から、その身体へと視点が移ることを意味する。つまり、露出ファッションにおいては、着衣者のエイジェンシーはその身体に還元され、結局のところ否定されることになるリスクが高いのである。露出ファッションを選んだ女性本人ではなく、その肌やボディラインが独立して注目され、称賛される（あるいは非難、拒否される）のである。

ダナ・カプラン (Dana Kaplan) とエヴァ・イルーズ (Eva Illouz) は、『セクシュアル・キャピタルとは何か (What is Sexual Capital?)』(2022 年) で、ハキムが唱える女性のエロティック・キャピタルこそ、男性たちが長い間搾取してきた女性のセクシュアリティにすぎないと指摘し、そこに男性中心社会の搾取構造を転覆する可能性を認めるのは困難であると論じる [Kaplan and Illouz 2022: 8, cf. Jeffreys 2015: 12-13]。

著者たちの批判は、構造 (社会体制) か個人かという古くからの問題に当てはめて考えることが可能だが、露出ファッションについて言えば、女性のエイジェンシーが否定されてしまうのは、そのエロティック・キャピタルが身体に結びついているからと考えることが可能だ。彼女は一見有利な立場にしながら、自らを身体へと閉じ込めてしまう。男性たちは、彼女の能力としてそのエロティック・キャピタルを評価することなく、身体的な魅力としてこれを楽しむのである。ハキムの主張は、女性を貞淑とふしだらに分け、後者を性的な搾取の対象に位置付けてきたという男性中心的な社会のあり方を強化することはあっても、攪乱することにはならない。性的魅力を過度にアピールすることは、女性を、自身の身体でありながら、自己を否定するような「肉

体 (flesh)」へと還元する——肉体化することになるからだ。

肉体化という問題は、露出ファッションに限らず、エロティック・キャピタルの価値に目覚めた女性全員が直面する問題でもある。エロティック・キャピタルが身体的魅力やセックスと結びついているゆえに、エロティック・キャピタルを行使することで女性たちは自らの価値を下げってしまう。こう考えると、モデル業やエンタメ業界などの「美的労働 (aesthetic labor)」<sup>5)</sup>を除いて、エロティック・キャピタルが積極的な意味を持つことはあまりないのではないか。そのことは、ハキムによる服装の TPO に関する保守的な主張に端的に表れている。

実際、セクシュアリティが重要な資質であることが明らかになった現代社会においても、性の二重規範に縛られている多くの女性たちにとって過度なセックス・アピールは「誤解」を招くものとして慎重に避けられてきた。処女性がすでにエロティック・キャピタルとしての価値を失い、自由恋愛やそれに基づく結婚が主流になった今、女性たちはセクシーであることが暗に求められている。しかし、それが過剰とみなされると、恋愛の対象 (本命) から性愛の対象 (セフレ: セックス・フレンド) へと変化してしまう。この問題は、ファッションを見て欲しい、それによって私のセンスや個性を見て欲しいという思いに反して、露出した肌やボディラインしか見えてくれないという露出ファッションのジレンマと地続きと言えないだろうか。露出ファッションには現代日本の女性たちが直面する問題が濃縮されているのである。したがって、露出ファッションが女性にとってどのような意味をもつか、そこにどのような困難が潜み、解決が可能なのかと問うことは、ことファッションにとどまらない広がりと深みを帯びたものなのである。

ただし、本論文ではカプランとイルーズにならって露出ファッションに意味はないと

か、男性に媚を売るだけのファッションだと主張したいのではない。この点を明示するため、日本のファッション研究において、重要な位置を占めている鷺田清一によるファッションと身体をめぐる論考を取り上げたい。たとえば『ひととはなぜ服を着るのか——ファッションは《社会の生きた皮膚》である』（1998年出版）で、鷺田は近いようでいて実は遠い自分の身体について論じている。他人の身体と異なり、自分の身体の場合、背中を直接見ることはできない。顔も鏡がないと見ることができない。

じぶんの身体はつねにイメージとして思い描くしかない。身体はこのように情報量の少ない、ぼんやりとした〈像〉であり、想像の産物でしかないので、かんたんに揺らいでしまいます。とてももろいものなのです。そしてこのようなもろい身体イメージを補強するために、わたしたちは日常生活のなかでいろいろな技法を編みだしてきたのです。[鷺田 1998: 28]

この技法の一つが衣服である。鷺田によると、衣服は接触を通じて身体の全体像を具体化することで私たちに安心感を与える。衣服は、「じぶんの輪郭を感じさせるもっとも恒常的な装置」なのである。この身体についての〈像〉が皮膚だと考えると、そのような身体像の形成に関わる衣服もまた皮膚であり、現実の皮膚もまた衣服のように取り替える（加工する）ことが可能になる。つまり身体加工もまた曖昧な身体像を具体化する技法なのである。

身体像という概念を通じて皮膚と衣服を結びつけて論じる鷺田の視点は非常に新鮮である<sup>6)</sup>。これを露出ファッションに適用すると、どうだろうか。肌見せファッションでは、衣服が身体の表面を覆う面積は通常の服より少なくなる。その分、女性たちは不安になると言える。この不安を払拭し、身体像を維持す

るためにさまざまな技術や配慮が必要になってくると解釈することも可能だ。見せる肌を演出するというのは、身体像の維持を意味するからである。

しかしながら、女性たちの配慮も技術も限界がある。肌見せファッションはコントロールできない身体を晒すことで、自身の身体像の曖昧さを拡大する。さらに、彼女たちの身体は、侵襲的な男性たちの視線に晒され、ますますコントロールが困難になる。こうして女性は肉体へと還元されてしまう。しかし、コントロールできない肌は、肌見せファッションの弱みであるだけでなく強みでもある。女性たちは、身体像に自分では完全にコントロールできない不確定要素を導入することで、「遊びの領域」に自らを置くことになるからだ。この領域を創出し、積極的に関わることで、女性たちはある種の「賭け」に及んでいるのではないか。同じことは、ボディラインを強調する場合にも当てはまるだろう。もちろん、この「遊びの領域」こそ、女性たちの評判を悪いものにする——文字通り遊んでいるという不評を買う根拠になる可能性もある。そうしたリスクが存在するからこそ「賭け」なのである<sup>7)</sup>。

では鷺田自身、露出する肌についてどのように述べているのか。以下の引用から明らかに、彼の関心はどちらかと言うと衣服の方にある。

ネックレス、指輪、長手袋、腕を締めつけるプレスレット、踝に巻かれたアンクレット、そして素肌をちらつかせる袖口、胸元、スカートの裾……。そう、衣服がぱっくり口を開けているところが、身体の「裂け目や断層や傷口や孔」とって代わるのだ。あるいは、身体を透かし見せるトランスパランの生地、身体表面を鋭い線で区切る黒のブラジャーやガーターやストッキング、スリットを入れて身体をちらちら露出させるドレス……

それらのすべては、タブー視されている身体秘密の際にますます近づくことによって、身体を侵犯するようにみえて逆にそれを回避する。記号が作用するその論理にますます深く組み込まれることによって、である。[鷺田 1998: 186-187]

最後の文章はわかりにくいかもしれないが、少し前の段落にメイクされた口唇（これも身体の際である）は、何かを呑み込むような「存在の開口部」[鷺田 1998: 186]ではなく、アクセサリのような記号として変換されると述べているように、一見危険な開口部は衣服によって安全な場所へと変換されると指摘しているのである<sup>8)</sup>。

とはいえ、着衣者である女性自身は安全からほど遠いところにいるのではないか。鷺田の視点に欠けているのは、女性側の観点、したがってそこに作用するジェンダーの力学への配慮と言えないだろうか。一見客観的な衣服へのまなざしが、多くの哲学的議論に似てジェンダー化されている——男性目線と重な

る——とみなすのは言いすぎだろうか<sup>9)</sup>。この点を保留しつつも、露出ファッションに「遊びの領域」を制定することで、別の顔が見えてくる。それは、統御不可能に見える世界に積極的に身を委ね、その可能性に賭けてみようという女性たちの能動的な態度である。本論文では、以上の問題を念頭にエロティック・キャピタルによる性的な自立か性的な従属かといった二者択一的な図式を批判するためにも、露出ファッションの実態に迫りたい<sup>10)</sup>。

1.4 方法

本論文では文献ならびに女性7名と男性6名のインタビュー・データに基づいて考察を行う。インタビューは、2022年11月から12月にかけて蔡が友人たちに声をかけて行った。なお、本論文執筆時に補足的なインタビューを2名の女性に実施したが、彼女たちについては全体の議論から外しているため、表1には掲載していない。インタビュー対象となった女性と男性の年齢と職業は表1と2の通りで、全員異性愛者ある。具体的な質問事項については論文末にある付録を参

表1 インタビュー対象（女性）について

名前（仮名）	年齢	職業	インタビュー期日	タイプ（後述）
川島 美穂	20代前半	看護師	2022.11.26	A
杉山 まどか	20代前半	会社員	2022.11.27	C
広村 泉	30代前半	不明	2022.12.8	B
大山 沙那恵	20代後半	接客業	2022.11.16	C
黒瀬 香代	20代前半	学生	2022.11.29	A
栗本 聡美	20代前半	学生	2022.11.7	A
山田 舞	20代前半	会社員	2022.10.29	D

表2 インタビュー対象（男性）について

名前（仮名）	年齢	職業	インタビュー期日
片山 勝治	20代前半	学生	2022.12.15
松井 雄大	20代後半	フリーター	2022.12.20
小谷 紀明	20代後半	会社員	2022.12.29
豊川 敦也	20代後半	会社員	2023.1.2
澁谷 義康	30代後半	接客業	2022.12.27
下谷 秀樹	40代前半	会社員	2022.12.29

照されたい。

図1は、ファッションへの関心度の高さと、露出の程度の高さをそれぞれ二分し、それをマトリックス式に表したものである。それぞれの回答をもとにインタビューした女性たちを当てはめたのが表1の右欄（タイプ）である。ファッションへの関心度や露出度は、彼女たちの意見と蔡の観察に基づく。

- A タイプ 3名：ファッション関心が高く、露出も高い
- B タイプ 1名：ファッション関心が高く、露出が低い
- C タイプ 2名：ファッション関心が低く、露出が高い
- D タイプ 1名：ファッション関心が低く、露出も低い

## 2 露出ファッションの歴史

女性のセクシュアリティがコントロールされている社会では、イスラーム社会に限らず女性の身体を公的に晒すことは禁じられてきた<sup>11)</sup>。西欧も例外ではないが、興味深いのは

ボディラインについては強調されてきたことである。そのような女性像を支えたのがコルセットであった。コルセットをつけることこそ貞淑な女性の条件で、つけないと体だけでなく貞操観念もルーズ（緩い）と思われていた [Steele 1999: 457]<sup>12)</sup>。

女性が窮屈なコルセットを脱ぎ捨て、今のブラジャーの原型となるものを身につけるようになったのは20世紀初めである。現在のブラジャーの原型は、フランスで1889年にエルミニエ・カドル (Herminie Cadolle 1845-1926) が発明したスチアン・ゴルジュ (soutien-gorge) で、コルセットの上部を切り離して肩から吊るすものだった。

第一次世界大戦が始まると、戦争へ動員される男性に代わって女性労働者が増加した。この結果、上流階級の家での使用人は減少していく。アメリカ映画『風とともに去りぬ』(1939年公開) でスカーレット・オハラのコルセットを締め付けるようなメイドがいなくなったのである。他方で労働者階級の女性たちもまた動きにくいコルセットをつけるのをやめることになる [カーン 1989: 33]。加えて、1917年にはアメリカ合衆国政府が出

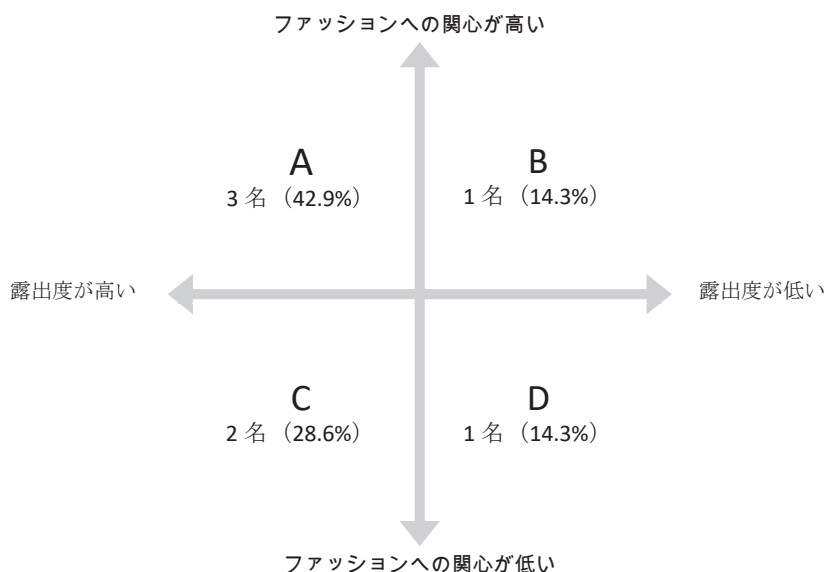


図1 ファッションへの関心と露出による女性の分類



した、金属を確保するためにコルセットの購入を止めるようにという通達もまた、コルセット離れに拍車をかける。第一次世界大戦の数年間で、コルセットはやがてしなやかな素材のガードルとなり、コルセットの代わりに乳房を支える役割としてブラジャーが普及していったのである。

こうして動きやすい下着が出現すると、女性たちはこぞって新しいタイプの上着を着用することになる。男性と同じ服を着たり、短髪にしたり、さらには、これまでに比べて露出の多い服を着始めたのである<sup>13)</sup>。

1934年には、パリ在住のアメリカ人デザイナー、メインボッカー（Mainbocher 1890 - 1976）によってストラップレス・ドレスが考案され、人気を博する。この人気は第二次世界大戦後も続き、現在は定番のウェディング・ドレスになっている。他方で、ストラップレス・ドレスは「慎みがない」と、キリスト教やアメリカ合衆国陸軍などで規制の対象になった〔クリスマン＝キャンベル 2023: 160-166〕。現在しばしば耳にするネイキッド・ドレスという言葉が最初に使われたのが、このストラップレス・ドレスであった。

ストラップレス・ドレスの流行は下着にも大きな革新をもたらす。

バンドタイプのブラジャーはすでに市場に出回っていたものの、ボディを支えるのに必要な曲線そのものを平らにしようとしたため、使いものにならなかった。そこで肩紐もなく、背中も胸も多く開いた新しいブラが「イヴニング・ブラジャー」として売りに出された。〔クリスマン＝キャンベル 2023: 138〕

1960年代、社会現象となった流行として無視できないのは、脚の露出を強調するミニスカートである。これを演出したデザイナーは、フランスのアンドレ・クレージュ（André

Courrèges 1923-2016）と英国のマリー・クワント（Mary Quant 1930-2023）であった。クレージュは1964年に宇宙旅行をイメージしたコレクション「ムーン・ガール」で膝上丈のスカートを提案した。他方、クワントはそれ以前からミニスカートをデザインし、ロンドン・チェルシー地区を中心に販売していた。第二次世界大戦後、世界中で若者を中心とした各種の反対運動やストライキが拡大し、価値観の入れ替えの連続であった社会動向を反映した象徴のようなアイテムとして、ミニスカートが大流行する。それは、セックス・アピールの象徴というより、大人になることを拒否し、保守的な価値に反旗を翻した若い女性たちの象徴であった。

最初は、ファッション界からもエレガントでないと批判されたが、多くのデザイナーたちが追従してミニスカートを次々発表していったことで、流行が始まってから10年後も依然として着用され、徐々に定着していく。日本でも、ミニスカートは1960年代後半～1970年代前半まで流行し、「淑女」を対象としてきたファッション業界は、世界的に若者志向へと転換するのである〔村田 2003〕。

クワントは、スカート丈が短いとガーターベルトが見えることを懸念し、厚手のタイツやパンティストッキングを使用することを提唱し、ミニスカートとともにタイツも爆発的に売れた〔クリスマン＝キャンベル 2023: 228〕。これもまた、露出ファッションと下着との密接な関係を示唆する事例である。

最近では、ネイキッド・ドレスという名で、下着が透けて見えるようなラグジュアリーなドレスが注目されている<sup>14)</sup>。パーティシーンでの着用が増加する一方で、露出度が極めて高いことから、いかにランジェリー的な要素を打ち消し、リアルに落とし込めるかといった技量が試されるアイテムである。

ただし、「ネイキッド・ドレス」という言葉は、上述したように、ストラップレス・ドレスに対して使用されたのが最初である。現

在想定されているような意味での「ネイキッド・ドレス」は、クリスマン＝キャンベルによると1962年5月の民主党パーティのステージに登場したマリリン・モンローが来ていた「イリュージョン・ドレス」に遡る〔クリスマン＝キャンベル 2023: 198〕。このドレスは、モンローの身体に直接縫い込まれているかのような印象を観客に与えた。現在一般に見られるネイキッド・ドレスはシースルーで下着が見えるものが主流だが、セレブたちがレッドカーペット上で披露して世間を騒がせるのは、下着をつけていないことがわかるようなドレスである。そこには、整形手術によって改善し、フィットネスクラブで鍛え上げた身体への自信が垣間見える。

日本でワンレン・ボディコンという言葉が流行ったのは、バブル期真最中の1980年代後半であった。ワンレンは、髪型のワンレングスの省略で、同じ長さに切り揃えた髪を意味する。当時のワンレンはロングヘアが一般的であった。ボディコンはボディコンシャスの省略で文字通り身体を意識したファッションを指す。ボディコンを文字通り、身体にフィットさせてボディラインを強調する衣服と考え、20世紀前半まで遡るかもしれないが、日本の文脈で想定されているのは、派手な色のミニスカートやピンヒールの靴を履いて、ディスコで躍り狂う女性たちであった。

以上、西欧のファッション史を中心に露出ファッションの流れを駆け足で見えてきた。下着に注目すると、コルセットは、第一次世界大戦を機にガードルとブラジャーに代わり、戦後になると下着をつけていないことを誇示するようなネイキッド・ドレスが登場する。コルセットは変貌し、最後にはダイエットとエクササイズによって女性の身体の内側に居場所を見つけることになったのである〔Steele 1999: 473〕。露出ファッションの興隆と密接に関係していた下着の変化である

が、下着の補正機能に頼らずに自分の身体を鍛えあげようとする女性たちも増えてきた。そして、そのような身体こそが露出に相応しいとみなされたのである。しかし、女性たちは、完全に下着から自由になったわけではない。この点については次節で詳述する。

露出ファッションは、それがパリであれ、ハリウッドであれ、あるいはロンドンの街中であれ、つねに保守層から、はしたない、ふしだら、軽率だと非難されてきた。そのような批判にもかかわらず、女性たちが選ぶファッションの幅は広がり、露出ファッションが確実にワードローブに自分の場所を見出した。それは、男性の性的まなざしに応じるために生まれたファッションというより、機能的かつ活動的で、また女性の自立を促す象徴として受け入れられてきたのである。

### 3 見せる技術と配慮

#### 3.1 さまざまなアイテム

次節で紹介するインタビュー・データからも分かるように、下着以外にも、女性たちは露出を統御するためにさまざまな工夫を行っている。本論文では、これらをまとめて「見せる技術」と呼ぶ。

##### 1) コルセット

前章で述べたように、コルセットは本来ウエストを引き締めるだけでなく、乳房を下から支える役割も果たしていた。ブラジャーやガードルが生まれたことで、体型補正として使われる機会が減ったが、美しくびれを作るという機能は保持されたため、今ではタイトなワンピースなどと合わせて着用されている。また姿勢を改善するためにコルセットを着用する女性が増え、さらに腰痛を軽減させるためのサポーターとして使われることも多い。他にも、腹部を締め付けることで胃を圧迫し、食べ過ぎ防止に着用する場合も認められる。露出ファッションを着用時にコルセッ

トをつけない場合でも、姿勢改善や体型維持といった役割は結果的に身体の魅力を増加する。いずれにせよ、多くの機能を持つコルセットは、女性にとって今なお支持が高い下着である<sup>15)</sup>。

## 2) ブラジャー

ブラジャーこそは、現代における女性用下着の代表である。今や女性が当たり前のように着用するブラジャーだが、そもそもなんのために着用しているのかを意識する人は少ない。その役割は以下に述べるように、多種多様である。女性がブラジャーを着用するきっかけの多くは、男性の目を引くのではないかと、乳房の揺れが気になってという理由にある。その際、母からの助言も重要である。

ブラジャーの重要な機能は、胸の補正である。ブラジャーは胸の形を整えバスト周りを美しく見せることができる。その形はメーカーやシリーズによって異なるため着用者自身が希望している胸の形を実現することが可能である。胸同士を寄せて谷間を作り大きく見せるものや、逆に胸を押しつぶすことなく小さく見せ、着痩せできるようなブラジャーも存在する。

魅力的な体型づくりでは、基本的に豊満なバストと反重力的なヒップ、そしてそれに相対するように引き締まったくびれで成り立つS字のボディラインに焦点が当てられる [アレックス 2016]。ブラジャーは、バストの部分上げることのみならず、相対的にウエストをより細く見せることができる。実際にここまで考えてブラジャーを選ぶ女性は多くないが、それでも露出ファッションを好む女性、とくにボディラインを強調するファッションを好む女性にとってブラジャーは必須のアイテムである。

レディース・ファッションでは、服の下に着るインナーや下着は見せてはいけないことが暗黙のルールとされている。ショーツを隠すことはもちろん、服の上からブラジャーの

柄が透けていたり、肩紐が露わになっていたりとすると、だらしない女性だというレッテルを貼られてしまう。したがって、女性は露出ファッションを着るとき、いかにして下着を隠すかということに気を遣う。そこで、通常のブラジャーと異なるタイプとして、Tシャツブラやストラップレスブラ、「見せブラ」と呼ばれているブラジャーが生まれた。これらは、すべてが露出ファッションをより快適にするために考案されたものである。

Tシャツブラとは、表面の凹凸がほとんどなく、名前の通りTシャツなどの薄着の下に一枚で着用可能なブラジャーで、夏の時期になると多くの女性の支えとなっているアイテムである。

ストラップレスブラとは、ブラジャーの肩紐を使用せず、ホックのみで乳房を支えることができるアイテムである。上述したように、ストラップドレス用に売り出されたブラジャーは「イヴニング・ブラジャー」という名前であった。ストラップレスブラは主に、オフショルダーやキャミソールといった肩まわりの露出の多い肌見せトップスと併せて活用されている。

肩紐については、透明色のストラップでの解決策もある。これは通常のブラジャーの紐と付け替えることで、見えている肩紐の存在感を薄めることができる。しかし、このビニール素材の透明ストラップは、光を反射し肩紐が強調されてしまうため、下着を隠すことにおいてあまり効果的ではない。にもかかわらず、この種のブラジャーが受け入れられていることを考慮すると、日本の女性たちにとって下着を隠そうという意図を示すことの方が、実際に隠れているかどうかよりも重要なかもしれない。

見せブラとは、ファッションとして見せることを前提として作られたブラジャーである。オフショルダーやシースルーのトップスなどの肌露出の高い衣服では、通常のブラジャーを完全に隠すことは難しい。そこ

で、ブラジャーにインナーらしくない華やかなデザインを施すことで、ブラジャー自体をファッションの一部とみなすことを可能にしたのが見せブラである。総レースで下着のワイヤーや紐部分をカバーしたものや、背中部分にレースの装飾を追加したもの、また後ろホックの代わりにリボンを編み上げたものなどが流通している。

### 3) ガードル

ガードルは、腰上あたりからヒップ、そして太腿までの下半身のラインを魅力的な形に整えてくれる履き込み型の補正下着である。中には、ウエストをサポートするガードルもあり、コルセットの代用として使われることも多い。産後の体型補正、骨盤の保護、下半身の保温効果やヒップ下垂の防止にもなるとされ、非常に幅広い年齢層で利用されている。ガードルは、主に下半身のラインがよく出るボディライン露出のファッションと合わせて使用される。タイトスカートやスキニーパンツはもちろん、パンツタイプのスーツなどとともに、仕事着に合わせて履く女性も多い。

### 4) パンティストッキング／タイツ

ナイロン製のパンティストッキング（pantyhose、以下パNST）は、1959年にアメリカで開発、発売された製品である<sup>16)</sup>。国内での製造は1968年に始まる。フォーマルな場面での着用が必須となっている下着のため、ほとんどの女性が複数着所有している。パNSTはウエストからつま先にかけて下半身全体を包む履き込み型で、半透明のベージュ色が定番である。類似した形状の衣類として、タイツが挙げられるが、基本的には30デニール（denier）未満のものはパNST、30デニール以上のものがタイツ（tights）とされている<sup>17)</sup>。タイツはパNSTに比べて厚手のため、ベージュ色で素足感を演出するパNSTに対し、下半身の防寒や保温といった用途で着用されるため、黒色で展開さ

れがちである。

パNSTとタイツは、露出ファッションの際に大きな助けとなり、主にミニスカートやショートパンツなどの脚の露出の多いボトムスとコーディネートされる。脚を着圧してより綺麗なシルエットを作ったり、肌の色むらを隠すこともできる。とくにミニスカートでは、ショーツが見えてしまうことに対する不安を払拭できることから、透け感の少ないタイツとセットで着用されることが多い。そのため、タイツを履くことができる冬でしか、ミニスカートを履かないという女性もいる。

パNSTは基本的にはベージュカラーだが、葬儀などで使用するブラックのタイプも広く普及している。薄手で半透明の素材のため、ブラックの生地から素肌の色が透けることで、「透け見せ」ファッションにも活用することができる。透け感は、素肌を想起させることで、素肌が出ているよりもセクシーな印象を与えやすい。

### 5) ニプレスとヌーブラ

ニプレスとは、バストトップに貼り付けることで、これを隠すことが可能な絆創膏状のシートである。今回、実際にニプレスの開発元である常盤薬品工業の広報担当者から「ニプレス」という商品について話を伺うことができた。

インタビューによると、「ニプレス」は1981年に発売され、40年以上のロングセラー商品となっている。ニプレスが開発された頃、日本のレディースファッションではノーブラや薄着が流行していた。そこで、ブラジャーを着用することなくバストトップの浮きを抑え、摩擦から保護する商品として、「ニプレス」が誕生したという。「ニプレス」は、女性が露出ファッションへ踏み出すにあたって、大きく貢献したアイテムであると言える。

また、プライベートなファッション以外の用途として、着替えの多いアパレル撮影の場で、ファッションモデルがブラジャーよりも



手軽なニブレスを着用するほか、肌露出の多いコスプレ現場での需要も高いそうだ。またビジネスシーンでは、シャツの上からのバストトップの浮きを抑える用途で、男性からの需要も高まっており、近年では男性用のニブレスが開発された。

ヌーブラ (NuBra) は、ニブレスと同様に胸に直接貼り付けるタイプの下着である。もともと乳がん患者向けに乳房の代替として2002年にアメリカ合衆国のブラジェル (Bra-gel) 社によって開発されたもので、粘着性のあるシリコン素材が使用されている<sup>18)</sup>。ニブレスよりも肌を占める面積が多いため、バストを引き寄せたりボリュームアップさせたりすることが可能である。デコルテや胸の谷間の部分が開いている肌見せファッションでは、胸のボリュームを出すためにヌーブラを採用することが多い。「ヌーブラのおかげで露出ファッションがだいぶ楽しめるから助かってはいます」と露出ファッションが好きな女性 (栗本 A)<sup>19)</sup> が述べているように、ヌーブラは露出ファッションの必須アイテムと言える。

## 6) ペチパンツ／ペチコート

ペチコート (petticoat) は、スカートやワンピースの下に履くスカート形の下着で、ペチパンツ (pettipants、見せパン) はスカートだけでなく、パンツの下にも履ける下着。透け防止、またショーツのラインの隠蔽などに効果がある。

## 7) Tバック

Tバックは、外国ではソング (thong) やタンガ (tanga) と呼ばれるショーツで、お尻が隠れるフルバックと対比される。パンツを履いても下着のラインが隠れるのがメリットである。

## 8) ムダ毛処理

ムダ毛処理はほとんどの女性が日常的に

行っているため、詳述する必要はないと思われるが、直接露出する身体に対して行われる点で、これまで見てきた下着やそれ以外のアイテムと異なる。ムダ毛処理以外にも、直接身体に関わる施術として永久脱毛、シワやシミ、たるみなどの除去、さらに豊胸などがある。

## 3.2 インタビュー調査から

本節では、インタビューを行った女性7人の意見を紹介したい (表1)。彼女たちは露出ファッションを着るときに、どのような配慮や工夫を行っているのだろうか。

露出ファッションの定番とも言えるミニスカートを履いていて一番気になるのは、中のショーツが何かのはずみで見えてしまうことだ。多くは、ショーツの上からペチパンツやストッキング (タイツ) を履いて直接見えないようにしている。

ミニスカートの中にはショーツが見えないようにペチパンツを履いて、夏だとストッキングも重ねています。結構窮屈です。この状態で1日過ごすと、かなり疲れる。ショーツが見えないように履いているから、透けないようなタイツを履くときは使わないけど、夏は必需品ですね (栗本 A)<sup>20)</sup>。

ショーツが見えそうなショートパンツを履く場合にも、ペチパンツは重宝である。

横にスリットが入っていて、隙間をレースで埋めているデザインのショートパンツを持っているんだけど。スリットが結構深くて、ショーツが見えちゃうから、そのときにベージュのペチパンツを履いている (黒瀬 A)。

しかし、見えることを前提にTバックを

履く露出ファッションを好む女性もいる。

ショーツは、まあ万一見えたときにやばくないやつを履くかな。生脚のとき、ショーツの上には何も履いてない。コットン素材だったりハイウエストのおばさんみたいなパンツが見えるよりは、Tバックが見えた方が全然いい（川島 A）。

上半身の露出には、キャミソール、ショルダーカットやオフショルダーがある。これらを着用するときが一番気になるのがブラジャーの肩紐であることが、以下のインタビュー・データから理解できる。

キャミソールの場合、さまざまな対策を見て取れる。ブラトップ（バストの部分にカップが入っているためブラジャー不要のキャミソール）を着用していたり、ストラップレスブラと合わせたり、ヌーブラをつけていたり、さらにはシャツを羽織って外から絶対に見えないようにしている女性もいた。

キャミソールは、ユニクロのブラトップを着ています。だからブラレスで着られる。普通のキャミソールって、ブラと一緒につけると、キャミソールの紐とブラの紐がずれてダサイ。ブラジャーのアジャスターとかって見えちゃうとダサイと思う。でも、アジャスターがついてないやつは補正力がない。小中学校のときにキャミソールがすごく流行ったんだけど。それこそ透明ストラップをつけている子もいたけど、透明ストラップも見えちゃうのでなんか違う感じがして（広村 B）。

基本、ストラップレスブラとしか合わせない。着るときは支度がちょっとめんどくさいですね（栗本 A）。

キャミソールは、ヌーブラにしている。

ヌーブラつけて谷間が見えるくらい（黒瀬 A）。

インタビューの中で唯一ファッションにも露出にも関心のない山田はつぎのように述べる。

キャミソールは、普通にブラの上に着て、さらに Y シャツを上から羽織るようにしています。ブラの肩紐を隠したいので、シャツはもう絶対に脱がない。胸元もそんないてないです（山田 D）。

シースルーやノースリーブの場合、キャミソールを着たりしてブラジャーが見えないように工夫している。また、ノースリーブの場合、ブラの紐が外れて見えるのを恐れてストラップレスを使っている女性（広村 B）もいた。さらに A タイプの女性では、バックオープン服ではヌーブラを使ったり（栗本 A）、またオフショルダーの場合、紐を見せたくないでストラップレスブラを着用する（黒瀬 A）。

オフショルダーのときは、服と同じ色の紐がついているブラジャーかストラップレスのものをつけています。あと、肌見せ用のブラで、背中に装飾がついているものも可愛い（栗本 A）。

ショルダーカットについて、C タイプの大山は片方の紐を外すという工夫をしている。

これは、片方の鎖骨のところが開いてる形を持っていて、普通にしているとブラ紐が見えちゃうから、見える方の紐だけ肩から下ろしている。透明のストラップを買えばいいんだけどさ、あ、持っているんだけど今は実家にあって。そう、でも片方だけしか使わないんだったら、[なくても] いいかなって。[ショルダー

カットは] 天気が良くて、体や肌のコンディションが良い日だったら、いつでも着る。

ボディラインを強調するファッションについてはどうだろうか。下品に思われると嫌なので肌の露出は避けたいが、女性らしさをアピールしたいときの定番であるタイトスカートについては次のような意見を聞くことができた。

ロングが1つと、ミニが1つあります。タイトスカートはTバックと合わせるようにしている。あと、網タイツを中に履くこともある（黒瀬 A）。

ガードルは、タイトスカートのときに履く。タイトスカートはお尻のラインを丸くした方がいいと思う。セクシーに見える。他ではあんまり履かないかも。結構窮屈だから（栗本 A）。

スキニーパンツで気になるのは、下着のラインが見えることだ。このため、Tバックやレースバック、浅履きショーツを履く。

このときはTバックかな。お尻が見える形だから、Tバックでショーツのラインが見えないように。もしくはレースのショーツを履くときもある（杉山 C）。

スキニーを履くときは何も仕込まないけど、腰周りがパツパツになる。だからショーツはね、ノーマルじゃなくて浅履きを履く。浅履きだと、お腹の肉があんまり乗っからないんだよね（大山 C）。

最後にヌーブラについて触れておきたい。

露出ファッションではないが、水着のときとか、パーティドレス、緩めのシャツ

でブラジャーのストラップが見えてしまうときにヌーブラを使う（川島 A）。

川島は次のようにも述べている。

緩めのシャツとか着るとブラ紐が見えちゃうから。私からすると、胸の谷間が見えているよりブラ紐が見えている方が下品だから。うん、下着の紐は、太くなっているやつとか、見せブラなら全然いいんだけど、普通の下着の紐はファッション性がないな。

ヌーブラを絶賛する A タイプの栗本はブラジャーの下につける場合もあると述べる。

支えられてる感が物足りない、ノンワイヤーの見せブラの中につけることもある。でも、夏だと蒸れるから気持ち悪くて。最終手段ですね。

総じて、露出ファッションが好きで、ファッションに関心がある A タイプの女性は、ヌーブラやTバックなど、「見せる技術」にもこだわりのある（表3参照）。反対に露出にもファッションにも関心がない女性（山田 D）は、ヌーブラを持っていない。またキャミソールからブラジャーが見えるのを気にしてYシャツを着て絶対脱がないという発言から明らかなように、キャミソールの露出性をわざわざ否定している。ニプレスを使用していた女性は川島 1 人しかいなかったが、D タイプの山田と C タイプの杉山をのぞいて、全員がヌーブラを所有していた。

女性たちに見られる上記の配慮は、世界的にも一般的なのか、日本女性に特有なのか、現時点では判断がつかないが、考察に値するテーマであろう。先の山田（D タイプ）のように、キャミソールからブラジャーが見えるのを気にしてYシャツを着て絶対脱がないとか、ノースリーブの場合、かならずキャミ

ソールを着用するなど、下着が気になって露出を抑えている本末転倒と思われる事例が認められたのが興味深い。

## 4 身体の特権的地位

### 4.1 露出ファッションへの関心

第2章で見たように、現在の露出ファッションの背景にはおよそ100年に近い歴史が認められる。露出への大きな流れが変わることはまずないだろう。しかし、肌を過度に露出するのは悪印象を与えるという認識は完全に払拭されたわけではない。実際に、なぜ肌見せを避けるかと質問したところ、普段露出ファッションをする5人（A＋Cタイプ）のうち4人が「遊んでいそうだと思うたくないから」と答えた。ここからも、露出ファッションと切り離せない「売春婦」像につながるふしだらな女性像の面影が現代に残っていることがわかる。

インタビューを通して、露出ファッションを好む女性と好まない女性の間で決定的な違いを見出すことができた。露出を好む女性は「自分の長所を見せたい」と考え、露出を好まない女性は「短所を隠したい」と考えているということだ。

露出度の高いファッションを好む杉山と黒瀬は次のように述べている。

隠すより出した方が、スタイルがよく見えるから。女性らしく見えるから（杉山C）。

自分が必死で作り上げた体を美しく見ることが出来るから。自分が痩せていると気づいたときから着るようになった（黒瀬A）。

このように述べる黒瀬は、2023年9月現在太ってきたので、露出ファッションは着て

いないという。

露出ファッションを好む女性は、自身の身体性のセクシーな部分を強調し、できるだけ魅力的に見せようとする傾向にあり、逆に、露出ファッションを好まない女性は、短所を隠すことでコンプレックスが見えなくなり、自分の身体が本来よりも良く見えると考える傾向にあった。

ミニスカートは積極的に履くが、上半身はいつも大きめのサイズ感の服で覆うと語るBタイプの広村は、自身の肩幅や厚めの背中にコンプレックスを感じており、なるべく上半身を隠したがっていたが、脚に対するコンプレックスは持っていないため、好みのデザインのミニスカートで露出ファッションを楽しんでいる。

広村に、街中の女性がしている格好で、悪印象を覚える場合はあるかと尋ねたところ、「肩幅が広く厚みもある女性が肩や背中を出しているのは不快に感じる」と回答をした。加えて、下半身に対しても同様の主張があるか尋ねたところ、彼女は、「下半身は肉がついていてもセクシーな印象を与えるため、むしろ視線を奪われることもある」と語った。自分の短所を意識する人ほど、他人の持つ同領域に対する批判的な「視線」を持っている。他人が自身に向ける視線の意味を推測することで、彼女たちは短所を隠すことにいっそう夢中になるのである。

女性が服を選ぶときに重要になるのは、自身の身体への視線、つまり身体についての自覚だけではない。他者の視線、とくに待ち合わせ相手の視線である。Aタイプに限って言えば、5人のうち4人が女性の友人と外出する際、彼女らは自由に着飾り、肌の露出もボディラインの露出も、とくに区別せずに服を選ぶ。しかし、それが初めてのデートで、相手の男性に与える第一印象が重要な場合、露出ファッションを好む女性は肌見せファッションを選択肢から除外する<sup>21)</sup>。ただし、露出ファッションをやめるのではな



く、タイトスカートのようなボディラインが際立つファッションを着て待ち合わせ場所へ向かう。彼女たちは異性を相手にするとき、自らを上品に見せるために肌の露出はしないが、セクシーなボディラインを隠そうとはしない。セクシーな魅力を相手に訴えることを否定しないが、肌見せは上品ではないと判断するのである。

私は、デートのときは肌の露出はしない。でもボディラインは出すかも。よく考えれば、「デートのときは」タイトスカートのシャツばかり着ている。それか、ニットのワンピース（川島 A）。

一回目のデートに行くなら、タイトスカートのミニスカートじゃない。でもズボンでもない。女の子らしいけど、誘っている風じゃないみたい。それに、お上品さを出したい（杉山 C）。

恋人（候補）のつぎに重要なのが、母親の視線である（7 人のうち 3 人が回答）<sup>22)</sup>。

共著者の蔡自身、露出ファッションを好んで着用しているが、母親に露出度が高い、と指摘されることがままある。露出ファッションに限らない。蔡が初めて自分で服を選んだとき、化粧を覚えたとき、いつも「まだ早い」と指摘されてきた。

ただ中高生のときは、お尻のラインが出た格好をしていると、お母さんが「もうちょっと隠した方がいいんじゃないか」みたいな。そういうことを言われたから「ヒップラインを出したくない」っていうのもあった（広村 B）。

昔は、お母さんの好みに気を遣ってた。何か言われるのが嫌で、お母さんが嫌いなファッションアイテムとか、避けて買うようにしてた。もっと早くから好きに

すれば良かったと思うけど、親に頼りきりの年頃だったからしょうがないのかなと思う（栗本 A）。

うるさいのは、お母さんだけではない。「[中学生の] 弟から、まるで父親のように「そんなはしたない服を着るんじゃない」と毎回言われる。肩が出ていたり、膝より上の丈感というだけで怒られるのが鬱陶しい」という 20 代の女性もいた<sup>23)</sup>。

以上から、母親（ときに弟）は、娘が大人の女性としてふるまうことを無意識的に嫌う傾向にあり、その影響のせいで女性が露出ファッションを好まなくなるのではないかと推察できる。インタビューを行った女性で、「最初から[母親に] 従わずに好きに振る舞えばよかった」と後悔の念を吐露した女性もいた。

実際、彼女たちは露出ファッションで街に出ると嫌な思いに遭っている。

ナンパが増えて、ニヤニヤ見られることが多い。男を誘うためにこの服を着ているわけではない。セクシーな服を見ている = OK サインではないことがわかっていない。褒められる際、服可愛いねとかじゃなくて、エロいねと言われる。同じ服を着ていても女の人からはこんなこと言われない、可愛いねとかスタイルいいねと言ってくれる。しかし、男の人はエロいねっていう。それ、褒め言葉だと思っているのかな。セクシーだね、ならまだいいけど、エロいねは完全にアウト。すべての心のシャッターを閉ざす。（どうしてエロいと言われるのが嫌ですか？）男性からエロ目線で見られることが、私にとって喜ばしいことだと、勝手に思われている感じがする。セクシーな服を着ている = OK ではないので、無許可で性的消費をされた気分になる（杉山 C）。

表1に含まれていない20代前半の女性は、露出度の高い服を着るとナンパが増えたり、ジロジロ見られたりするが、その背後には「露出度高い＝男女関係に飢えているみたいな偏見があるような気がする」と指摘し、「軽い女に見られていることにイラッとする」と述べている。

街中だけではない。黒瀬（A）は、大学の先生から「下着で学校に来るな」と言われたという。

こうした男性たちの心ない態度が、女性たちをして露出ファッションに慎重にならざるを得ないという状況を生み出し、世間にはびこる女性を貞淑とふしだらに分ける考え方を強化しているのである。

#### 4.2 ファッションに対する意識と露出

露出ファッションを好む女性の中でも、ファッションへの関心が高いAタイプとそうでないCタイプでは異なる特徴があった。Aタイプは、ボディライン露出や肌見せ、シースルーなどあらゆる露出ファッションを好み、露出ファッションの小道具を多く所有している。逆に、Cのタイプは、露出用の下着にあまりこだわらず、所有する数がAタイプよりもずっと少なかった。この分析から、下着というものは思った以上に、表に出るファッションとの結びつきが強いということが読み取れる。

注目したいのは、Cタイプの女性は、衣服にはこだわらない代わりに、靴やメイクなど、衣服以外に強いこだわりを持っていたことだ。

ヒールを履くと、脚が細く長く見えるから、8センチ以上のものがいい。それにミニ丈のボトムスを合わせると、スタイルがよく見える。（中略）「Heather」<sup>24)</sup>の靴は高くないのに質がいいんだよね。

こんなに高いヒールなのに歩いても靴擦れしないから。やっぱり、靴に合う服が売ってるから、服もそこで買っている。（中略）服に関しては、本当にこだわらない。選ぶときも、友達に全部任せている（大山C）。

私にとってはメイクが重要。服はいつも同じでしょう。メイクは鮮やかな青とかオレンジとかを使うから、選ぶ服に困らないようにしている（杉山C）。

大山はまた、脚を長く見せるため、より楽に着用できるハイヒールのシューズとミニ丈のボトムスにこだわり、気に入ったシューズに合えば、洋服はどのようなデザインでもかまわないと述べている。杉山は、メイクに強いこだわりをもち、どんなメイクにも合わせることができるよう、所有する服装はすべて黒一色で揃えていた。

自分をより良く見せる手段として、ファッション以外にもさまざまなものがある。しかし露出ファッションは、魅力を増すのに便利なため、衣服にそれほどこだわりがなくとも、「自分をより魅力的に」という思いが強い女性は、露出ファッションを採用するケースが多いと考えられる。換言すれば、Cタイプの女性たちは、露出ファッションが、ファッションを否定するものだと思っていて、ファッション性にこだわっても意味がないと考えているのかもしれない。

#### 4.3 露出ファッションを好む女性のジレンマ

コンプレックスについて問うと、Cタイプの大山は自分の胸の大きさを気にしていた。胸が大きいと、ボディラインの出る服やデコルテが開いている服を着たときに強調されるため、話をしているだけで胸に視線を感じる人が多い。胸に限らず、脚やへそが出ていても同様に目を奪われる傾向があると思われる

る。顔と同じく、身体はそれだけで人の注意を引く力に満ち溢れているのである。繰り返すが、身体の魅力を実際立たせる露出ファッションは、自らの存在意義を否定するようなファッションと言える。身体の出露とそれを助長する衣服は競い合うことなく両立することができるのだろうか。

この点について理解を深めるため、衣服の主要な目的を以下の三種類にわけて整理しておく。

- ① 着衣者が身体保護のため、あるいは属する集団を表すための記号としての衣服である。
- ② 着衣者の個性を表出することを目的とするファッションとしての衣服である。この場合は衣服とそれを着こなしている私が主役となる。
- ③ 体を見せるための衣服である。この場合主役となるのは着衣者の身体である。

ここで、冒頭で分類した4タイプの女性が、どの目的で衣服を着用しているのかを推定する。

Bタイプの女性はファッションへの関心が高く、露出が低い。この場合、彼女が着る衣服は、②に該当する。次に、ファッションへの関心が低く、露出が高いCタイプの女性は、衣服に対するこだわりをもたないので、③に当てはまる。そして、ファッションへの関心も露出もともに低いDタイプの女性は、さまざまな理由から身体を保護したり、集団的アイデンティティを表明するために衣服を着用している。よって、①に当てはめることができる。

では、ファッションへの関心と露出がともに高い女性は、どのような目的で衣服を選ぶのだろうか。Aタイプの女性を客観視したとき、多くの人間が③であるとみなすかもしれない。しかし、着用者本人は、衣服にこだわりをもち、数多の服の中からお気に入りのデザインを選び、購入し着用する。彼女たちは、

間違いなく②のファッションとしての衣服を楽しみ、衣服を通じて個性を表そうとしている。Aタイプの女性は、身体の出露に関する意識も高いが、傍観者が彼女たちに向ける視線はまさに露出された身体に対してのみであると言っても過言ではないだろう。したがって、着用者は露出をすることで、衣服の価値を否定してしまう。

蔡は、下着ショップで働いているとき、「恋人に見せるために可愛い下着を買ったのに、まったく見てくれない」という意見を多く耳にした。ランジェリーは、身体の上に重ねる衣服であると着用者は考えるが、これを見る他者、この場合恋人の男性にとって、下着姿の女性は下着姿の女性でしかなく、下着のファッション性への関心は皆無と言っていいだろう。女性の不満としてしばしば耳にする話だが、これは下着におけるファッション性の認識の相違が要因となっている。同じことが、露出ファッションにも当てはまる現象だと考えられる。ファッションの意識が高く、着ているものにもっと注目して欲しいのに、ファッション性の高い下着を含め、こと露出ファッションになると、他者の視線は衣服ではなく、肌やボディラインに向かう。これは、Aタイプの女性にとっては大いなるジレンマであろう。

#### 4.4 男性の視線

では、男性はどのように露出ファッションを見ているのか。

男性たちには、いろいろな女性の服装の写真をインタビューで提示し（付録2参照）、それぞれ抱える印象について尋ねた。キャミソールやミニ丈のボトムスなどの肌見せファッションに対して抱く印象は、後述するように人によって異なる。しかし、女性の露出が高ければ高いほど、男性は服の細部を見ることなく、身体のみを意識が向きやすい。肌の露出は、ボディラインの露出よりも露出の印象が強いため、身につけている衣服より

も先に肌に釘付けになるのである。これでは衣服の印象はかえってマイナスになってしまうだろう。

背中があいていると普段見ることが少ない分余計に見てしまう。肌の綺麗さや下着はどうなっているのか（上下共に）などが気になる。谷間、太ももは 100% 見る。次点で肩かな（澁谷 30 代後半）。

どの部位でも、露出度が高いのは、頻繁に見てしまう（豊川 20 代後半）。

澁谷に限らず、5 人の男性が脚の露出に視線を奪われやすいと回答した。女性から見れば、ファッションの観点から露出ファッションを選んだ場合、好みの衣服の魅力を伝えることができない。

男性は、露出は好きだが、そこに下着が見えるのは好まない。

谷間が見えていたり、下着のラインが見えそうなのは嫌。他人に見せるべきじゃないセンシティブな部分だと思う。脚はよく見てしまう。下着の肩紐が出ている場合、下着に工夫したら良いのに、と思う（澁谷 30 代後半）。

この辺りの感覚は女性と同じものだということがわかる。

肌の露出とボディラインの露出のうち、肌の露出の方が視線を奪われやすいが、ボディラインの露出の方が、総じて好感度が高い。これは、デート時に肌見せファッションは避けるという女性たちの考えと合致している。

たとえば、図 2 のような、ボディラインの露出をした女性の写真を見せたとき、インタビューに応じた 6 人の男性すべてが好印象を示した。

露出は少ないけど、〔ボディ〕ラインが



図 2 ボディラインを露出した女性

（出典：「1688 Shop Lady's Fashion 2017 流行ファッション商品番号 F677 一部」<https://item.rakuten.co.jp/1688shop/10001716/> 2022 年 12 月 7 日閲覧）

見えているのは妄想を掻き立てられるから良い（小谷 20 代後半）。

ボディラインの露出は、身体を全体的に覆うという性質上、肌露出が必然的に少なくなり露出という観点からは存在感は低いが、女性の魅力である S 字シルエットから衣服に覆われた身体について想像を掻き立てる。この写真の衣服は、清楚で上品な印象があるため、恋人が着ても、他人が着ても人気の高いファッションである。しかし、男性が意識するのは、身体のシルエットと衣服に包まれた裸体であるため、結果として肌が見えていなくても、ファッションとしての衣服の存在感が薄まってしまっている。

肌見せファッションについてはかなり好意的に受け入れられているが、男性の視線が多く集まるような場所で露出をすることについては懸念を抱いている男性が 4 人いた。露出ファッションについての否定的な意見は、他者（男性）の視点と密接に関係している。相手の彼氏の立場も気になる点は男性特有の



ものだろう。

すべての部位の露出に目がいってしまうかも。他人の露出に関しては、ラッキーとしか思わないけど、彼氏が隣にいる場合、彼氏は「彼女の露出ファッションを」どう思っているんだろうと思う（下谷 40 代前半）。

相手が恋人か他人かによって、見方が変わってくる。

ボディラインの露出はセクシーですごく好き。でも、肌の露出が多い女性を街中で見かけると、危なっかしくて気になってしまう（松井 20 代後半）。

危なっかしいという意見もまた、男性ならではの視点である。こうした意見は、自分の恋人についての両義的な考えと連動している。実際、恋人が肌露出の多いファッションをしているときには、他の男性からのまなざしを心配し、抵抗を感じるという意見が多く見られた（4 人回答）。

参考までに、男性たちの下着姿の女性についての意見も記しておく。女性がつけている下着のデザインなどを見るという男性が半数いたが、それが女性の望むような見方なのかは不明であった。これらの男性は、下着のデザインや色の大胆さに好感を示していたが、ブランドやファッション性に対するこだわりは薄かった。ガーターベルト、T バックや透けているものなど、挑発的なデザインや色味に対して人気が高かった。澁谷のみ、肌に合っているかとか、刺繍やレースを見ると答えたが、他の男性と同様、派手な下着が好みであった。

蔡が下着ショップで働いていた当時、女性下着を購入するきっかけとなる一番の要因はデザインであり、また、男性インタビューで登場した男性受けの良い T バックや派手

な色の下着は、好ましくないとする顧客が多数派であった。事例を 2 点挙げておく。

### 事例 1

T バックを勧めたとき、履き心地が悪いと断られる。また、見た目の大胆さから、「大丈夫、大丈夫 [今回は遠慮する]」というような反応をされることもしばしばあった。

### 事例 2

鮮やかな赤い下着も同様、攻めすぎているとして一般的には人気が低い。ビビッドな色は総じて好き嫌いが生じ、ネイビーなど深みのある色味やくすみカラーが人気。若い世代からは、白、水色など淡い色も人気が高い。ファッション感度の高い人は、むしろ鮮やかで珍しい色の下着を好んでいた。

女性用下着のブランドに明るくない男性にとっても、そのデザインがブランド名と結びつけられていて例外的に有名なのが、CALVIN KLEIN のグレーの女性用下着だろう。CALVIN KLEIN は男性用の下着としてもよく知られているため、男性の目に触れやすいという要因もあるが、それのみにとどまらずセクシーなアイテムとしても人気が高い。近年、この下着がグラビアや自撮りでのセックスアピールに使用されているのを見かける。

以上本章では、露出ファッションに身を包む女性のジレンマを考察した。衣服ではなく、肌やボディラインに目がいくという事実は、身体の特権的位置を明示している。一見剥き出しと見える身体は、露出箇所の大きさや場所によって多くの人の目を引くのはなぜだろうか。それこそ、他人の身体——とくに女性の身体——は通常衣服で覆われているからだ、というのがわかりやすい理由であろう。ここで衣服と身体はむしろ競合していると考え

えられる。

## 5 終章

本論文で2つのことが明らかになった。第一に、露出している身体は、たとえ自然に見えても、「見せる技術」によって加工され着衣者の配慮によって生みだされた身体であるということである。露出ファッションの「見せる技術」が露出ファッションを演出していると考え、露出ファッションで露出する身体は「生身の身体」、ケネス・クラーク (Kenneth Clark) の言葉に従えば「はだか (naked)」からはほど遠いことがわかる。クラークは、絵画や彫刻などで表現される理想的な身体を「裸体像 (nude)」と呼び、「はだか」に対比させている [クラーク 2004: 18]。露出ファッションによって露出した身体がはだかでないとしたら、それは女性たちにとっての裸体像 (の一部) あるいは裸体像に変容するような身体なのだろうか。すでに明らかのように、男性の視線のもと、女性は肉体的存在へと変容する。とすると、露出ファッションによって露出されているのは、裸体像へと変容する身体とも、他者の性的まなざしに晒される肉体であるとも言える。この曖昧さこそが露出ファッションの魅力ではないだろうか。インタビューからは、ナンパをうざいと思いつつも、露出ファッションを大いに楽しんでいるナルシスティックな女性たちの姿も見とれる。

第二に明らかになったのは、これから誰に会うのか、どんな場所を訪ねるのか、自分の身体的な長所や短所はなにか、といった他者や自己の身体への配慮に基づくファッションの選択が女性たちによってなされているということである。そこに認められるのは、自己の身体や他者の視線、そして社会との関係を念頭に、露出ファッションを選び、他者とのコミュニケーションを図ろうとする思慮深い、エイジェンティック (agentic) な女性

たちと言えないだろうか。もちろん、選択自体が広義の社会的要請に従っていることも否定できない。そこにまた、女性のエイジェンシーか男性中心の社会体制に従属する主体かという大きな問いが浮かび上がる。これに対し本論文では、女性たち一人ひとりの考え方や男性の意見を紹介・分析することで、できるだけ露出ファッションの実態に迫り、単純な二元論に陥ることを避けようとした<sup>25)</sup>。

今回は、露出ファッションに関する女性たちの意識に焦点を当てたが、露出ファッションの可能性や限界を論じるには、露出ファッションが好きな女性たちのライフストーリーやライフスタイルについてさらに分析する必要がある。この点を今後の課題として本論文を閉じることにしたい。

## 謝辞

本論文は、国際ファッション専門職大学の最優秀卒論に与えられる第一回 PIIF 賞に輝いた蔡天虹の卒業論文『露出ファッションのジレンマ』(2022年1月提出)に田中が加筆修正したものを基に意見を交換して完成したものです。卒論の調査及び分析にあたり、丁寧なご指導と適切な助言を賜った福田安佐子助教、二人の査読者、加えてご多忙にもかかわらず、快く調査にご協力いただいた常盤工業薬品様に感謝申し上げます。最後にお時間をとってインタビューにご協力いただいた方々に深く感謝の意を表します。本論文はJSPS 科研費 23K17532 の助成を受けたものです。

## 〈注〉

1) ただし、本論文では集団に対立する個人主義的な意味でエイジェンシーを使用しているわけではない。今回は省略しているが、露出ファッションを好む女性たちの連帯 (ネットワーク) などを射程に入れている点で従来のエージェンシーとは異なる。この点について詳しくは [田中 2018: 27-31] を参照。

2) この点については、西倉 [2005] や Jeffreys [2015] のレビュー論文を参照。最近では Widdows [2018] がある。

3) 女性を二分する言説はきわめて一般的に見える [田中 2019]。ここでは、服装との関係で女優のメイ・ウエスト (Mae West 1893-1980) が異種デザイナーに「レディであることを証明できる程度にルーズに、でも女性であることを示す程度にタイトな服を作ってちょうだい」と依頼したというエピソードを紹介しておく [クリスマン=キャンベル 2023: 254]。

4) 翻訳では「下品な」となっていたが、修正した。

5) 美的労働は、見た目の良さ、立居ふるまい、言葉使いなどの管理が求められる労働を意味する [Warhurst and Nickson 2001, 2020]。2020 年の書籍『美的労働 (Aesthetic Labour)』でエロティック・キャピタルに言及しているが、批判してはいない [Warhurst and Nickson 2020: 125-126]。

6) 鷺田は、また「衣服が身体の第二の皮膚なのではなくて、身体こそが第二の衣服なのだ」[1996: 28] と述べている。とはいえ、この主張は衣服の着用が常態化している人々を想定している点でけっして一般化できるものではない。ペニスケースしか身につけないイリアンジャヤのダニの人々にとって身体の全体を感じることができるのは、風の流れや気温、そして他者の身体の温もりなどであって衣服ではない。

7) 精神病院内でのもう少し深刻な事例を参照しながら、鷺田は「〈像〉としての身体と戯れる (jouer) ことでわたしたちはおそらく「わたしはだれか?」を賭けている (jouer) ののである。」[1998: 171-172] と述べる。

8) ただし、鷺田の三宅一生論やダンスなどのパフォーマンス論は、こうした曖昧さの意義を十分認識しているように思われる [鷺田 1998: 78-87, 126-138]。

9) 平芳は適切にも、鷺田の描く身体が「やけに透明性を帯びていて・・・女性」の問題が見えてこない」[2022: 204] と指摘している。

10) 「性差別からの自由」か「性的自由の達成」か、あるいは構造かエイジェンシーかという対立を超えて「個別の状況やそこに含まれる多義性」を重視する必要性については、[西倉 2005: 65-66] を参照。

11) 本章の記述は、ことわりのないかぎりクリスマン=キャンベル [2023] に多くを負っている。

12) コルセットが女性の活動を制限するだけの抑圧装置だったのかについては意見が分かれる [Entwistle 2000: 195-200]。その官能性については [鷺田 1996: 58-59] ならびに [Steele 1999] を参照。

13) 露出と下着とは密接に関係している [戸矢 2000: 7]。

14) [Takeuchi and Osawa 2022] を参照。

15) 後で紹介するインタビューの際、女性が所有する露出ファッション用下着を尋ねたところ、コルセットが 5 人と、最も多かった。

16) 当時は Panty-Legs という名だった。詳しくは、[Komar 2019; 福助の満足 2019] を参照。

17) デニールは繊維の太さの単位を意味する。ただし、数値はメーカーにより異なる [福助の満足 2019; 違いがわかる事典 n.d.]。

18) [NuBra n.d.; Bragel International Inc. n.d.] を参照。

19) インタビュー相手に言及するときは、名前とタイプを併記している。

20) インタビュー・データは、読みやすいように一部修正している。

21) 全員異性愛者であるため、デートの相手は男性である。

22) ハキムは「息子は母親から褒められることが多く、逆に娘は息子の二倍叱られる」[2012: 282] と述べている。

23) この女性は表 1 に含まれていない。

24) 20代の女性をターゲットとした日本のアパレルブランド。

25) なお、ヴィルジニー・デパントによると女らしさを過剰に強調する露出ファッションは「男性特権が失われたことにたいする謝罪」だと述べているが〔デパント 2020: 25-26〕、この場合女性は自身のエイジェンシーを失うことなく男性の価値観を受け入れている。

### 参考文献一覧

- アレックス、シラー 2016『本能を揺さぶる「魅力」の法則』鹿田昌美訳、大和書房。
- カーン、スティーヴン 1989『肉体の文化史——体構造と宿命』喜多迅鷹・喜多元子訳、法政大学出版局。
- クラーク、ケネス 2004『ザ・ヌード——理想的形態の研究』高階秀爾・佐々木英也訳、ちくま学芸文庫。
- クリスマン＝キャンベル、キンバリー 2023『スカートと女性の歴史——ファッションと女らしさの二〇世紀の物語』風早さとみ訳、原書房。
- 田中雅一 2018『誘惑する文化人類学——コンタクト・ゾーンの世界へ』世界思想社。
- 田中雅一 2019「セクシュアリティ・ジェンダー体制とその宗教的攪乱——デーヴァダーシーと子宮委員長はるをめぐる」『宗教研究』93 (2): 107-134。
- デパント、ヴィルジニー 2020『キングコング・セオリー』相川千尋訳、柏書房。
- 戸矢理衣奈 2000『下着の誕生——ヴィクトリア朝の社会史』講談社メチエ。
- 西倉実季 2005「「美」を論じるフェミニズムの課題——二元論的思考を超えて」『F-GENS ジャーナル』4: 61-67。
- ハキム、キャサリン 2012『エロティック・キャピタル——すべてが手に入る自分磨き』山口未和訳、共同通信社。
- 平芳裕子 2022「鷺田清一以降の「ファッション学」」『現代思想 2023 年 5 月臨時増刊号 総特集＝鷺田清一』51(5): 199-210。
- 村田仁代 2003「自由な表現を目指して」佐々井啓編『ファッションの歴史——西洋服飾史』朝倉書店、pp.148-160。
- 鷺田清一 1996『モードの迷宮』ちくま学芸文庫。
- 鷺田清一 1998『ひとはなぜ服を着るのか——

ファッションは《社会の生きた皮膚》である』NHK 出版。

- Entwistle, Joanne 2000 *Fashioned Body: Fashion, Dress and Modern Social Theory*. Cambridge: Polity.
- Jeffreys, Sheila 2015 *Beauty and Misogyny: Harmful Cultural Practices in the West* (Second Edition). London: Routledge.
- Kaplan, Dana and Eva Illouz 2022 *What is Sexual Capital?* Cambridge: Polity.
- Steele, Valerie 1999 The Corset: Fashion and Eroticism. *Fashion Theory* 3 (4): 449-473.
- Warhurst, Chris and Dennis Nickson 2001 *Looking Good, Sounding Right: Style Counselling in the New Economy*. London: Industrial Society.
- Warhurst, Chris and Dennis Nickson 2020 *Aesthetic Labour*. London: Sage.
- Widdows, Heather 2018 *Perfect Me: Beauty as an Ethical Ideal*. Princeton: Princeton University Press.

### インターネット資料

- Bragel International Inc. n.d. Intellectual Property. <https://www.bragel.com> 2023 年 1 月 7 日閲覧。
- Komar Marlen 2019 Tights are Now a Fall Fashion Staple—But They were Once a Revolutionary Style Statement. *Time* 2019.09.25 <https://time.com/5680431/tights-fashion-history/> 2023 年 1 月 2 日閲覧。
- NuBra n.d. 「ヌーブラとは」 [https://www.nubra.jp/f/whats\\_nubra](https://www.nubra.jp/f/whats_nubra) 2023 年 1 月 7 日閲覧。
- Takeuchi, Asa and Kyoko Osawa 2022 「今季のパーティーシーズンの主役は、ネイキッドドレス！リアルにどう着こなす？」『VOGUE』2022.12.11. [https://www.vogue.co.jp/fashion/article/weeklycoordinate-see-through-dress?utm\\_brand=vogue-jp&utm\\_social-type=owned&utm\\_source=twitter&utm\\_medium=social](https://www.vogue.co.jp/fashion/article/weeklycoordinate-see-through-dress?utm_brand=vogue-jp&utm_social-type=owned&utm_source=twitter&utm_medium=social) 2022 年 12 月 22 日閲覧。
- 違いがわかる事典 n.d. 「“タイツ”と“ストッキング”」 <https://chigai-allguide.com/cw0422/> 2023 年 1 月 2 日閲覧。
- 福助の満足 2019 「タイツとストッキングの境界線！30 デニールならフォーマルでもはける？」2019.11.22 [https://f-manzoku.jp/column/20191122\\_68](https://f-manzoku.jp/column/20191122_68) 2023 年 1 月 2 日閲覧。

(2023 年 12 月 22 日受理)



付録：インタビューでの質問事項

本論文を執筆するにあたり、調査の際に作成したインタビューの質問内容を以下に提示する。なお、本誌掲載にあたって、写真をすべて線画に変更している。

付録1 インタビュー質問内容 - 女性

- 1 性別、年齢、出身地、職業を教えてください。
- 2 自分は露出ファッションをする方だと思いますか？（ここで、客観視もする）
- 3 露出ファッションについてどう思いますか？
- 4 露出ファッションをする or しない原因、理由、きっかけがあれば教えてください。
- 5 好きな服装・スタイル・ブランドを教えてください。
  - i その理由やきっかけはなんですか？

- ii 学生時代の制服のスカートは短く調整していましたか？
- 6 ボディメイクをしていますか？あるいは、した経験がありますか？
  - i どんなことをしますか？
  - ii 自分の体型へ自信はありますか？
  - iii （もしコンプレックスの話があれば）きっかけを教えてください。
- 7 下図3と4のチェックリストを渡し、回答してもらう。→チェックされた項目について掘り下げる。  
（例）ミニスカートについて  
    どういう下着に合わせていますか？  
    どこで、誰と、何をするときに着ていますか？ 着用頻度を教えてください。
- 8 下着のデザインにこだわりはありますか？また、よく選んでいる下着の色と、その理由を教えてください。

問い：普段着ている、持っているアイテムがあれば、数を記入してください。持っていなければ×と記入してください。

	ミニスカート ミニワンピース	ショートパンツ	ローライズ	スキニーなどライン のでるパンツ	ダメージデニム	タイトスカート
						
個数						
	ノースリーブ	シースルー	オフショルダー ショルダーカット	バックオープン	キャミソール (ファッション用)	パーティドレス
						
個数						

図3 チェックリスト - アウターとインナーの関係1

問い：持っているアイテムに○をつけてください。


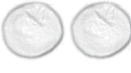

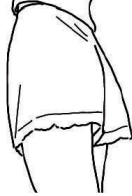
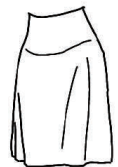

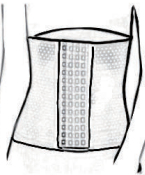

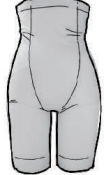


	ブラジャーの 透明ストラップ	ストラップレスブラ	ニップレス	ヌーブラ	ベチパンツ (見せパン)	ベチコート
	省略					
○/×						
	スリップ	コルセット	ガーターベルト	ガードル	パンツストッキング パンスト	ニーハイソックス
						
○/×						

図 4 チェックリスト - アウターとインナーの関係 2

- 9 図 5 のチェックリストを渡し、回答してもらおう。→チェックされた項目について掘り下げる。
- (例) レースバックタイプについて  
このデザインを選ぶ理由を教えてください。
- このショーツとコーディネートする特

- 定のボトムスがあれば教えてください。
- この中で買おうと思わない形があれば、その理由を教えてください。
- 10 あなたは、外出をするとき、誰かの視線を意識しますか？
- 例：他人の視線、家族の視線、待ち合わせ相手の視線

問い：ショーツタイプの中で、持っているアイテムがあれば、その数を記入してください。持っていなければ×と記入してください。

	レースバック	ノーマルタイプ(フルバック)	ボクサー/ボーイズ レングス	タンガ/Tショーツ
個数				

	紐りボン付き	ジャストウエスト	その他あれば、個数の欄に○マークを記入してください。
個数			

図 5 チェックリスト-ショーツの形状

付録 2 インタビュー質問内容 - 男性

- 1 性別、年齢、出身地、職業を教えてください。
- 2 好きな女性のファッションスタイルはありますか？（体型、容姿は気にしないものとする
- 3 図 6 の写真の中でとくに好きな服装、嫌いな服装はありますか？（人の体型や服の色は気にしないものとする）
- 4 恋人が外出時、露出度の高い服を着ているときにどういう印象を抱きますか？  
下記の部位単位で教えてください。（脚、肩、背中、脇、お腹、ボディライン、谷間、胸のシルエット、その他）  
嫌だった場合、それを恋人に伝えますか？
- 5 他人が街なかで露出度の高い服を着てい

るのを見たとき、どういう印象を抱きますか？ 下記の部位単位で教えてください。（脚、肩、背中、脇、お腹、ボディライン、谷間、胸のシルエット、その他）  
どの部位が露出されているときに視線が誘導されやすいですか？

- 6 彼女の下着が上下揃っていないとき、どういう印象を抱きますか？
- 7 ワンナイトの際、女性の下着が上下揃っていないとき、どういう印象を抱きますか？
- 8 セックスするとき、女性の下着の色やデザインに視線を向けますか？
- 9 セックスするとき、女性の下着の色やデザインで気持ちやモチベーションが変わりますか？ →上がるもの、下がるものあれば、どんな下着か教えてください。

- 10

スタイルの良くない人が露出の高い服や攻めた格好をしているのを見たとき、どう感じますか？
- 11

自分自身の下着にこだわりがありますか？（履き心地やデザインなど）
- 12

恋人の服がかわいい、似合っていると感じたとき褒めますか？
- 13

ナチュラルメイク、濃いメイクのどちらが好きですか？

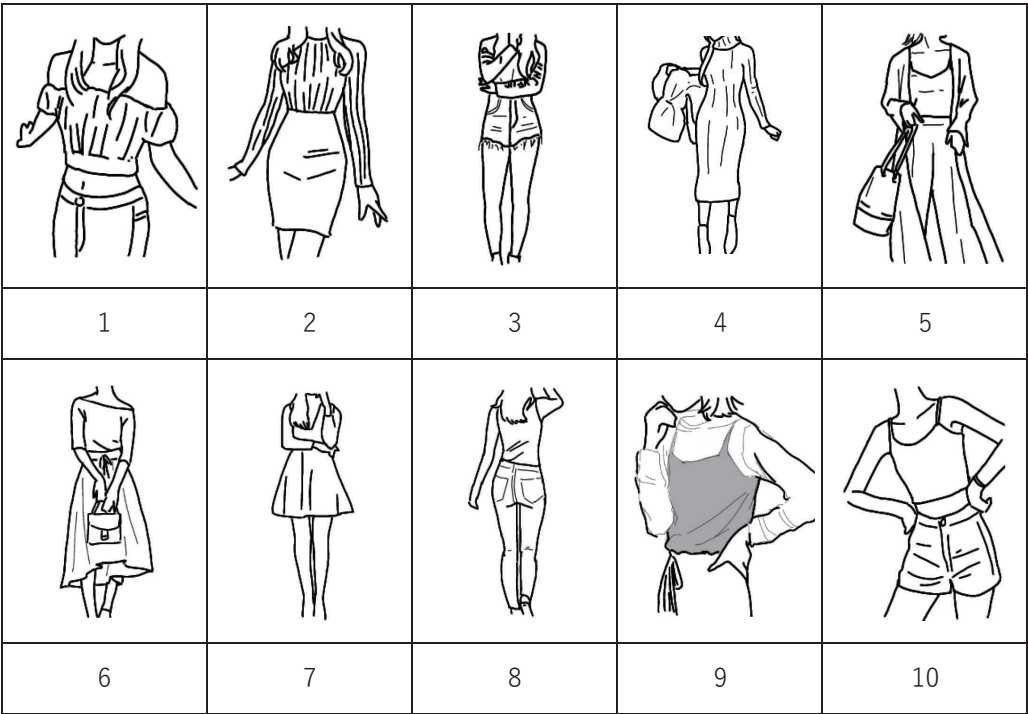


図6 チェックシート - 女性の露出ファッションスタイル



# The Dilemma of “Revealing” Fashion: Technology of Display and Body on Display

Masakazu Tanaka  
Tsai TianHong

## Keywords

Gender, Agency, Gaze, Revealing Clothes, Body Shape

The purpose of this paper is to explore “revealing” fashion, which refers to clothes that allow an excessive amount of skin to show or accentuate one’s figure, and discuss women’s agency regarding fashion. When showing one’s body excessively, it is necessary to take care of the body in an implicit way. As a result, the body wearing revealing clothes is far from one’s “natural” body. Because the revealing clothes show a lot of skin, the wearer will give the mistaken impression of having loose morals. Furthermore, because these clothes will attract attention to the body, the clothing itself will be disregarded. In this paper, we will call this phenomenon the “dilemma of revealing clothes”. Women who care about their reputation typically avoid such clothes. In this sense, revealing fashion inherently includes an element of self-denial. We will first examine the trends of revealing clothes, then focus on the fact that the rise and popularization of revealing clothes in the West is closely related to the changes in undergarments. Next, we will introduce the undergarments and other props that enabled revealing fashion and consider the women’s thoughts based on the interviews. Then, we will dive into the dilemma of the women who prefer revealing clothes, and finally, we will discuss the agency of the women who wear such clothing.